

日本の表情

広島駅から県庁ゆきのバスに乗った。ちょうど朝の出勤時のことで、車内は満員であった。三十歳前後の男の勤め人がふたり、腰かけた私のすぐ上の吊革につかまって、何かしきりに話している。途中の乗場から、若い娘さんがひとり乗り込んできた。夏の服装のことで、腕はあらわであった。前のふたりの男とは反対側の、車の少し前寄りに、やはり吊革につかまって位置を占めた。と、さっきのふたりの男のうち娘に近い方の男の右手がいきなり大きく伸びて、娘の吊革を持った右腕にその指先がふれたかと思うと、そのまま吊革の方へもどっていった。このしぐさは、私に若干の不審をいだかせながら、しかしたいへん自然らしく進められた。そのとたん、男の方をふり向いた娘の唇に、好意を示すかのような微笑がうかんだ。私は、この男と娘とは、同じ職場の仲間であろうと思った。男が娘の腕をつついたと見えたのは、朝のあいさつのかわりに、いたずら半分にされた合図でもあろうかと思った。通勤列車などでよく見かける風景だから

である。ところが、その男は、娘の微笑にはぜんぜん応じないばかりか、娘の存在など意に介しないふうで、隣の男と話しつづけている。娘は微笑のもってゆき場にこまった面持ちであったが、やがてその頬から笑いのかげが去り、平常の顔にかえっていった。私は、この奇妙な光景を目撃して、その現象の意味するところを考えてみようとした。

男が、右手を大きく廻したのは、おそらく、左手で持っていた吊革を右手に持ちかえるためにとられた動作で、娘の腕に指先がふれることが、意識的になされたわけではあるまい。むしろ、異性の肌にあふれたという感覚も、混雑する乗り物の常で、ほとんどなかったであろう。私のこの想像は、前後の関係から推して、たぶん当たっているだろうと思う。しかし、まだ心にしこりのように残るものがある。それは娘の頬に反射的にのぼってきたあの微笑である。

私は、心理学や生理学の専門の知識には暗いのであるが、外部から急激な刺戟が与えられると、人間はまず反射的に緊張する、そしてその刺戟の意味するところを読みとろうと身構える、その意味をだいたい理解して後それに対する態度を決定する——およそこのような順序で人間は外部の刺戟に因應するのではないかと思う。そうしてみると、娘さんのとった態度は、かなり異常である。自分の腕に加えられた刺戟の意味をたしかめる前に、反射的に微笑をうかべてこれに応じたのである。

男の加えた刺戟の意味をたしかめた後、相手の無礼をとがめるか、好感をもってその意をむか

えるか、あるいはしいて平氣を装おうとするか、態度をどれかにきめるのが普通である。それにしても、娘の頬にとっさにのぼった微笑は、何もことさら媚態の意識をともなつたものではあるまい。いわば自然の表情のようなものである。しかし、私にはその自然さがおそろしい。

敗戦が、われわれ日本人にもたらしたものが何であるか、現在まだその影響の渦中にあるわれわれには、それを十分見きわめることができない。しかし、そのなかで一つだけあげてみるなら、こういうことはいえそうである。「何物」かに對する媚態が、大方の自然のポーズとなつたということ——疑ったり、反撥したり、理解しようとしたりする段階を跳びこえて、「何物」かに對する追従笑いが、大方の日常の表情となつたということがそれである。しかもそれは、個人のうへだけの問題ではない。一國の、あるいは一時代の「風俗」は、いわばその文化の表情である。今日、巷の一見華やかに見える表情の裏に、歴史の空洞を見ぬく眼と心を持った者は、日本の遭遇している悲劇が、どんなに深刻なものであるかに想い到るであらう。

たまたま同じバスに乗りあわせた娘さんの邪氣のない微笑から、このような罪な推論を導くことに對して、あるいは残酷のそしりを用意される向きもあらうかと思う。しかし、悲劇は多く無心のうちに行なわれてゆくものである。たとえば、子どもの心ない遊戯のなかに、時代の暗さがそっくり反映しているとき類である。娘さんのうるわしい微笑のかけに、こんな事実を想像するのは、私の杞憂の描く、單なる妄想にすぎないであらうか。

そしてこれは、やがてことばの生活にも、関連した問題である。戦後日本人のことばの生活の建て直しの方策の一つとして、言うべきことを、言うべき時に、はっきり言いうる勇氣を持たねばならぬ——と説かれてきた。まことにもつともなことであるが、問題はその勇氣をどうしてふるい起こすかである。臆病者にただ勇氣を持つてといったところで、どうにもなるものではない。それはすでに、ことばの生活の課題が、単なる技術論の域を脱して、主体の生き方やモラルの問題の方へ移行していることを物語るものではあるまいか。少なくとも、そういう問題をぬきにしては、技術論が生きた技術論とならなくなったことを意味するのではあるまいか。そして、さっき私が、娘さんの微笑を手がかりとして探り当てた問題も、やはりこんなところに根をおろしているのではないかと思う。

(昭和二十九年六月)